

# CAMD 報告会

(Center for Development of Advanced Medicine for Dementia)

アルツハイマー病の病態のさらなる理解から  
次世代治療薬の開発へ

分子基盤研究部 標的治療薬開発室

篠原 充 室長

平成29年9月14日(木) 16時00分～  
第1研究棟2階大会議室

世界的にも類をみないほどの早さで高齢化が進む日本では、2017年において500万人以上が認知症を有し、今後もその数は増大すると想定されており、その社会的対策は急務である。アルツハイマー病 (AD) は認知症の半数以上を占めるが、その大部分は孤発性であり、原因は十分には分かっていない。AD 患者脳内の主蓄積物質であり、原因とされるアミロイドβ (Aβ) を標的とした薬剤が臨床試験中であるが、少なくとも発症してからではAβは相当数蓄積しており、あまり効果がないのではということがコンセンサスになりつつある。そのような状況の中で、大部分を占める孤発性ADの脳内で、Aβがなぜ、どのように蓄積するのかとともに、もう一つの主蓄積物であるタウや、APOE 遺伝子や糖尿病などの危険因子の役割なども含め、さらなる病態の理解による創薬開発が今後必要ではないかと考えられる。そこで我々は、動物モデルや細胞モデルの解析とともに、ヒト剖検脳や臨床データも積極的に解析し、病態の理解に務めてきた。本報告会では、我々の最新の知見とともに、これからの研究の計画について、ご紹介していきたい。